

- 1982年4月 千葉大学法経学部、同人文学部、同教養部、東海大学文学部、専修大学法学部等非常勤講師
1983年4月 東京大学東洋文化研究所助教授
1991年7月 同 教授
2012年3月 定年により退職
2012年5月 東京大学名誉教授

< 受賞・名誉学位 >

- 2008年 トルコ国財団法人トルコ文化奉仕財団トルコ世界トルコ言語功労賞受賞
2009年 キルギス・トルコ・マナス大学(在キルギス共和国)より名誉博士号を授与される
2014年 トルコ共和国功労勲章受勲
2015年 トルコ歴史学協会名誉会員選任

私のオスマン史研究の回想——私の比較史への道の第一段階

鈴木 このシリーズは「知の先達たちに聞く」というのですが、私自身は先達などではなくて、まだ若手研究者のつもりでいます。タイトルに「第一段階」と付けたゆえんです。

若い頃、イスタンブールでどういう人たちと接触があって、どういう暮らしをしていたかということは、トルコ語をお読みになる方は、*Türk Edebiyatı* (『トルコ文学』)の466号に出ているインタビュー(“İstanbul bana Tokyo’dan daha yakın” [イスタンブールは私には東京より近い])を読んでいただければ、かなりわかると思います。



I 何故オスマン史研究を始めたのか？

まず、なぜオスマン史研究を始めたのかという部分から始めさせていただきます。オスマン史研究を本格的に始めたのは修士課程に入ってからなので、今年でちょうど48年になるかと思います。ですから、かなり長いこと手がけているのは確かです。なぜオスマン史研究を始めたかという、トルコ研究をやる人というのは、「トルコが好きになったからトルコのことを」というタイプと、そうでないタイプとがありますが、私の場合はトルコが好きだから始めたのではなくて、かなり不純なところがあって、比較の対象としておもしろそうだったので始めたというのが本当のところでは。

もともと私は子どもの頃は、自然界を対象にしたナチュラル・ヒストリー、博物学のほうに興味がありました。ただ、昆虫採集とかを始めるより前は、母が嫁入り道具で平凡社の『世界大百科事典』の昭和戦前期の初版本を持ってきていて、あれを何遍も頭から暇にあかせて見ていました。ですから、人文的なものにも興味がないわけではなくて、その興味もどちらかというと、博物学的興味からそういうものを見るところがあったのは確かです。そのあとは昆虫とか石とか化石とかに興味がありまして、とくに小学校の頃は昆虫採集に熱心で、チョウについては、南関東のチョウだった

ら、飛んでいるチョウが何なのか、地面に映る影でもってほしいわかるというくらいでした。夏休みには勉強したことがなくて、ほしい外に出て、捕虫網を持って歩いて回っていました。まだあの頃はいろんなチョウがいた時期で、かなり熱心に集めていました。

ただ一方で、たしかに歴史も好きで、そこからオスマン史研究につながるようになるかと思うのですが、誠文堂新光社から『世界史大系』というのが出ていまして、毎月配本が出るのでこれを買ってもらって順次出るごとに読んでいました。イスラームの項を見ると、アラブ・イスラーム史は前嶋信次先生、オスマン史については三橋富治男先生が執筆しておられるという具合で、大先達の先生方が直接書いておられました。そうこうしているうちに、小学校の高学年、5年か6年のときに、泉靖一先生という文化人類学者でインカ帝国の調査をなさった方ですが、この方が岩波新書で出された『インカ帝国』という本を読んで衝撃を受けました。広大な領土を有していて、非常に発達した組織をもっていた大帝國が、ごく少数のスペイン人に乗っ取られてしまう。非常に衝撃を受けまして、それで大航海時代に興味を持ちました。というのは、アジアというか西洋でない社会——ことに中国の場合——は、西洋よりもはるかに文明文化の面で先に進んでいたのに、それが大航海時代を境にして、どうして力関係が逆転して、「西洋の衝撃」にさらされるようになったのか。中国の場合は19世紀になってからですが、ほかの世界はもっと早くにさらされる。一番先に影響を受けたのが中南米であるということになるかと思います。あとは東アフリカと東南アジア島嶼部です。こういったことで大航海時代に興味を持ちました。

もう一方で、アジアの復興の先鞭をつけたのは日本で、幕末明治改革がそれにあたります。そのあといろいろな問題が生じてきますが、アジア復興の先鞭というのは確かにあって、それもなぜだろうと、たぶん中学時代の頃に興味を持ちました。明治維新に興味を持ったのは、私の父方、母方双方の家系の家族史が明治維新と関係があったからです。私の父方の祖父は下関の出身なのですが、私の曾祖父が祖父を子どものときに連れて長崎に行って、長崎の蘭方医の先生のとこに預けて修行させた。祖父が蘭方医になって帰ってきたら、ちょうど第一次長州征伐が終わったあとで奇兵隊が結成されて、その軍医に入った。奇兵隊について転戦して、帰ってきてちょうど、最後に奇兵隊は謀反をたしか起こすのです。その直前に東京大学のもとになる大学南校が開かれて、オランダ語はできたけれども英語をやらないといけない、英学修行のためというので、大学南校の1回生として入学しています。しかもそのあと、東京図書館——できた当時は東京書籍館、いまの上野図書館の前身なのですが、あそこの館長にもなっていたのですが、明治14年の政変のときに、自由民権運動の系統で、立憲改進黨系ということで辞めて、それでビジネスの世界に入ったという人として、明治維新に直接参加した人です。他方、母方の先祖は、対馬の古い武家の家の出なのです。曾祖父の姉というのは、九州勤王党の総帥の一人の許嫁だった人ですが、お家騒動で対馬にいられなくなって九州に逃げて、野村望東尼の家に居候していたそうで、高杉晋作とかと会っていたという話を母が聞いていて、それを私も小さいころから聞いていましたので、明治維新というのが自分史なのです。そちらからも興味があって、これに関心を持ちました。

中学くらいになってからだと思いますが、岩波新書の幕末維新から明治の歴史についてのの本とか、いろいろ読んでいて、幕末明治維新史を比較史的に見たいと考えはじめました。ただ、日本の場合でも、もちろんその頃は講座派が非常に強く、一種の比較史ですが、あの場合はマルクス主義の唯物史観に従った比較史で、しかも英独仏など、かなり高度に発達した産業資本主義を持った先進的な西洋諸国と比べるとというのが普通でした。一方で、中国と比べるといいことはないけれど、中国は古い、幕末維新前の日本の先生です。他方、英独仏とかは幕末維新以降、開国以降の新

しい日本の先生です。これと比べることが多くて、アジアの独立国でまったく文化の違う国、同級生にあたる諸国と比べる例があまりないように思いました。それで比べる対象は何にしようかということ所高校くらいから考えていまして、タイかイランかオスマン帝国か、独立国が非常に少ない。植民地になると過程が違ってきてしまうので、独立国ということになると、わりと近いところにて上座部仏教圏——その頃は上座部仏教とはいわずに小乗といったのですが——に属しているタイか、イスラーム圏だったらイランかオスマン帝国あたりしか独立を保った国はないので、その辺から選ばなければいけない。タイについては、大学の3、4年のときは、日本語でウッドの『タイ国史』とか翻訳や、郡司喜一さんの『タイ国固有行政の研究』が戦争中に出ていましたけれども、日本語の文献はあまりないので、英語でタイの政治史とか官僚制について読んだりもしました。どうして結局タイを選ばなかったのかというと、やはり一つは、熱帯モンスーン地帯・米食地帯・仏教ということで文化的に共通性があるって近いところがあったからです。それとやはりタイは世界が小さいのです。東南アジアの梵字圏ではビルマと覇権を争っていて独自の地位を占めていますが、それほど大きい広がりがないところがあります。一方、イスラーム圏を考えると、イランの場合は、かなり独自の世界が早くからあるけれども、やや孤立した印象があるのです。これに対してオスマン帝国は、イスラーム世界の——少なくともスンナ派の——ムスリムにとっては世界帝國的な存在になっていて、清朝に近い存在であるということで、オスマン帝国をやってみようかなと思ったのが、トルコ研究をやってみようと思った始まりです。ですから、トルコが好きで始めたのではなくて、比較の対象としてトルコを選んでみようかと。ただ、行ってみたらあそこの国はなかなか居心地がよいもので、好きになったのは確かですが、好きだから始めたのではなくて、始めてからトルコは少なくとも嫌いでは決まっていなかったということになったのです。で、法学部に入ったのも、そういう経緯が中学高校を通じてあるもので、自分の思っているような比較がやりやすいところがどこかないかと思ったのですが、その頃、文学部の史学科というのは日本史、東洋史——といっても漢字圏が中心だった東洋史——、それから西洋史とははっきりと分かれてしまっていて、この3つの間を行ったり来たりするのは不便だろうと思いました。社会科学ですと、経済史のほうは、特にその頃はマルクス主義の影響が圧倒的で、かなり決まった枠があって、それでやっていないと問題意識が低いとかいわれそうでした、それとはだいぶ興味が違うものがありますし、どうも私の性向からして経済よりは別のほうが近いところがあるものですから、法学部に行こうとして、文Iに入りました。東大の場合、法学部には政治学科はないのですが、政治コースというのがあって、比較政治史、比較政治学といえ、3つの世界を行ったり来たりできやすいのではないかという考えがあったのです。法学部を選んだ理由も不純な理由で、法律をちゃんと勉強して公務員になるとか、法律家になるというのではなくて、比較史をやりやすいのではないかということで入りました。見通しはそんなに間違えてはなかったようで、一応法学部を卒業しまして、法学部の大学院に入るということになったわけです。

II オスマン史研究を始め留学を終えるまで

法学部に入ったのは入ったのですが、昭和43年に、4月になって駒場から本郷の法学部の後期の課程に入りましたが、ちょうどその5月から大学闘争が始まりまして、翌年の44年の1月が、安田講堂攻防戦で入試がなくなるというときでした。文学部ではその翌年も余波が続いていて、授業が普通に行われていませんでした。護雅夫先生のことは、高校在学中からそういう方がおられるというのは聞いていて、トルコ語の授業をやっておられて出たいと思っていたのですが、トルコ語

の授業も正規によそから行けるようなかたちでは行われていませんでした。昭和45年に法学部の大学院の修士課程に入って、文学部で開講されていた護先生のトルコ語の授業には出させていただくことにしたのですが、なんで法学部のやつがトルコ語の授業に来たのだということで、びっくりしておられたようです。大学院は法学政治学研究科に入りました。一方では政治学とか、政治史とか、政治思想史を勉強し、もう一方ではトルコ語の授業に出る、ということをしていました。政治思想史は、西洋の近代は福田歛一先生の演習でヘーゲルの『歴史哲学』などを読み、丸山眞男先生が健康を害されて、大学教授は辞められて非常勤講師になられていましたが、お弟子さんがまだたくさんおられたので、御自宅で演習を開いておられて、頼山陽の『通義』という日本政治体制論の本とか、水戸学の藤田東湖の『弘道館記述義』とか、要するに日本漢文を読ませられました。本職というか、属している課程の方はそういうことをやっていて、一方ではトルコ語の授業に出ておりました。修士の1年のときは日本オリエント学会には入っていなかったのですが、学会の大会が八王子のセミナーハウスであるというので、番外参加のかたちで出させていただいて、三橋先生にお目にかかってお話をうかがう機会を得ました。護先生は本職は突厥史で、トルコに30代半ばで留学されて、トルコ共和国の前身のオスマン史にも興味をもたれて、いろいろ論文やその他書いておられますけれど、基本的には一人勉強になりました。ひとつはイスラム研究文献の書誌で *Index Islamicus* というのがありますが、あれを頭から読みまして、オスマン史に関係のあるものについて、年代順・雑誌別に目録を作り、全部で80くらいの雑誌で200くらいの論文を表にして、そのバックナンバーがあるところでコピーをとっていくということを一方でやりました。もう一方では、イスラーム史の講義を嶋田襄平先生が、中央大学にいらっしゃったのですが、東大文学部で講じておられたので、先生の授業に出させていただきました。一年の後半は黒柳恒男先生がなさったり、中岡三益先生がなさったりして、前半を嶋田先生がされていたのに出させていただいたわけです。そうしましたら、どういう文献があるか教えてくださって、ソバージュの『イスラーム東方史入門』(*Jean Sauvaget's Introduction to the History of the Muslim East: a bibliographical guide*)があつて、英訳本が出ているからあれを見たらよろしいといわれたのです。それで英語の本の輸入業者さんのところに行ったら、たまたま1冊ありまして——カリフォルニア大学から出ていたと思いますが——、この英語本をもとにして書誌カードを作るということをやつて、その書誌カードに出てくる本はどこにあるか、所在を調べるということをやつていました。一方では、トルコ語の本のほうは、東洋文庫でもまだそんなにたくさんない時期でして、もちろん、東大にはほとんどトルコ語本がないという状態でしたが、穂高書店という、今でも続いています、これがちょうどできて少したった頃で、ここに行きましたら、トルコの本も取ったことがあるということで、トルコ語本を取り寄せ始めました。トルコの本は、エリフ書店というのがあつて、トルコ語本を取り寄せさせました。あそこの店主はイスタンブール大学の哲学科の助手か何かで、思想問題で大学を辞めて本屋さんになったという人だったようでして、この人を通じて穂高書店も取り寄せていたようです。そうやって少しは本を読みだして、テーマとしては、政治学専攻にいますからエリート分析からまずやってみようと思ひました。どういう人たちがオスマン帝国一代で変遷を遂げ、そして近代西欧の影響が決定的になって従来のモデルだけでは対応ができなくなっていったのか、新しい近代西欧モデルを取り入れようというときに、どういう人たちが権力の中核にいたのか、そのうちのどの部分が、「西洋の衝撃」に対応するために、イスラーム世界の中で独自に発展したモデルを越えて、近代西欧で生み出された新しいモデルを取り込む際の取り込み口になったか、といったことを知りたいと思ひました。その頃はちょうど近代化論、モダニゼーション議論が盛んな時期で、モダニゼーション議論をやる方は、社会学

や政治学出身の方が多くて、「16世紀のオスマン帝国は非常に盛んであったけれども、墮落、没落を重ねていって、最後に19世紀初めのマフムート2世の改革になって近代西欧モデルを取り入れて、ウエスタニゼーション、モダニゼーションを始めた」という議論でした。じゃあ、どうしてそれを受け入れることが可能だったのか。可能でなかった社会がたくさんあって、植民地になってしまったところが圧倒的に多いので、なんで対応できたのか。そこを説明しているものはほとんどありませんでした。17、18世紀は闇の世界のようになっていました。特に18世紀は、16世紀末から始まった没落過程が行き着くところまでいったところで、そこで19世紀になって改革が始まるという議論が中心でした。で、私としては、もとの土台がどんなものだったかということに興味があったので、始めたのは13世紀の末から18世紀の末までの5世紀間の支配エリートの分析です。国家という言葉を使うとモダン・ステートが頭に浮かぶので、あまり使いたくないのです。政治体と呼びたい。政府とかいうとモダン・ガヴァメントが念頭に浮かぶので、ルーリング・オーガニゼーション(支配組織)、組織論でとらえる支配のための組織というふうに名づけたいというところがありまして、その中枢になっているのが支配エリートである。その支配エリートがどう変遷したのかをやってみようと思いました。やる場合に、組織のほうからいく手もありますが、これは史料としての公文書が、印刷になっておりませんし、膨大なのです。たとえ印刷になっても、その頃のトルコ語の実力では、体系的に検討することはとてもできません。いまでもまだ、一番基本的な史料である『ムヒュンメ・デフテリ』——これを高松洋一君は『枢機勅令簿』と訳していますが——でさえ、ごく一部が出ただけという状態です。そこで私の場合は、中枢にいた人間の経歴のほうを分析していくことで、どういうタイプの人が出世するシステムになっていて、それがどの時点でどう変わったかということ調べることにしました。担い手が代わるということは、担っている組織も変わったということなので、そこから組織の違いを割り出そうということを考えまして、これを始めたのです。ただ、まだエリートそのものの人物の分析を体系的にやるというところまでいかないうちに、修士論文を2年間で出さなければいけませんので、一応、今までの研究史を踏まえたうえで、原初から16世紀までの間にだんだん支配の組織が君主専制的、中央集権的になって、トップのエリートたちが君主のしもべ、奴隷といっているかとは思いますが、一応カッコ付きで「奴隷」というクルたちが台頭してくるところまでを一応まとめて、修士をいただいて博士課程に進むことになりました。

その頃、トルコに行く奨学金は、日本の政府も出していないで、民間の奨学金もありません。トルコに行くためには、トルコ政府奨学金留学生というのに応募して、これで行くしかありませんでした。特に最近でこそ非常に経済が発展してきているわけですが、その頃は経済的にはまだまだかなり低調であった国ですので、旅費は出してくれませんでした。また、1年12カ月なのですが、授業のあるときしか奨学金が出ないのです。お休み中は休んでいるから、自分も休めという感じなのです。かなり大変ですが、それしかないなのでこの奨学金の試験を受けました。ちょうどそのとき一緒に受かった人は、一人は勝田茂さんです。大阪外国語大学で、トルコ語学科の初代の正式のテニユア付きの助教授になって、大阪大学に統合されたあとも、初代のトルコ語の教授をやった人です。それとあとは、ヒットライト研究の大村幸弘さんです。3人で、初めて留学生試験で会ったのですが、東京の原宿の竹下通り——いらっしやったことがある方がいるかどうかわかりませんが、今は、巣鴨がお年寄りのメッカだったら、竹下通りは若い方のメッカみたいな感じでにぎやかですが、その頃は普通の通りでした——、そこの蕎麦屋でそばを食べながら、トルコに行ったらまた会いましょうと話しました。

お二人はアンカラに行ったのですが、私はイスタンブルがとにかくオスマン帝国の帝都ですから、イスタンブルに行きまして、イスタンブル大学の文学部に外国人研究員ということで入れてもらいました。最初の1年くらいは、オスマン制度及び文明講座というのをもられたターイブ・ギョクビルキン (Tayib Gökbilkin) 先生の授業に出ました。ターイブ先生は学部の授業を、いろんなテーマ——中央組織、地方組織とかいったテーマでやっておられまして、これに出ておりました。トルコ語については、文法、単語を覚えて、文章はかなり読めるようにはなっていて、それも使って日本で修士論文も書いたのですが、しゃべる機会はほとんどありませんでした。最初にトルコ語で受け答えしたのが留学生試験のときで、2回目に受け答えをしたのが、トルコに入国して空港で税関の人に何か申告するものがあるかといわれて、「ありません」といった時、という具合で、日常会話は大変不便だったのですが、大学の講義のほうは、主な用語は知っているので、「てにをは」がよく聞き取れないというところがありますけれども、ある程度理解できました。おかしいのは、最初の夏のセメスターが終わったあと試験になったときに、おまえのノートを貸してくれというトルコ人の学生がいました。貸してはやったのですが、ほんとに大丈夫なのかなと思いましたけれども。同時に、本が全然手元にないので、集めようというので、その頃は、バヤズイット広場の裏側——バヤズイット・モスクのある広場と、それからカバル・チャルシュ (グランド・バザール) をつなぐところ——にサハフラル・チャルスス (古本街) というのがあって、それから、その外側にいくつか、広い通りを隔てた反対側にも古本屋街がありました。古本屋通いを始めまして、本を集め出したのです。

2年目からは、大学の授業は学部用の授業が主なので、図書館のトルコ語の写本にどんなものがあるかを調べたいと思ひまして、写本調査を始めました。純粋文学のディーヴァン、古典定型詩はちょっと範囲からずれているので、とりあえずは見ない。それからイスラーム教学も除く。ところで、イスラーム教学の中心テーマはシャリーアですが、シャリーアを「イスラーム法」と訳しますが、あれは法ではなくて戒律なのです。ヒンドゥー教でいえばダルマにあたるものです。ですから戒律が中心で、戒律の中に、現世で、裁判で決着を一応つけなければいけない問題についての戒律もあって、その部分はしたがって裁判規範としても通用すると思うのです。法律というのは社会生活のルールで、それについて争いが生じたときに公的な裏付けのある裁判機構があって、そこで裁判の基準になるのが法律だと思います。そこでケリがつくのです。シャリーアの場合はそこでケリがつかないで、最後の審判のときに最終的なケリがつくのです。本当はそちらなのです。ただ、社会生活の中ではとりあえず目前のときには裁判規範になって、裁判で決着する。講義なんかでは、わかりやすくするために「イスラーム法」と訳されるのだと思いますが、基本的には「イスラーム律法」と訳すべきだろうと思います。ウラマーも、聖職者といったりするけれども、カトリックの聖職者と違って、教義上、イスラームの場合は人と神とを媒介する存在がいなくて本来おかしい。また神学者というのも不適切で、本当は律法学者というのが一番近いと思います。ただ、律法学者というのは、ユダヤ教のラビのことを律法学者と訳しますから、そちらにとられてしまったりで難しく、どう訳していいか困る、そこでイスラーム教学者とでも訳しているのです。ただ、基本は戒律学者ですから、ウラマーというのは。

話が横にそれましたが、そちらの文献はたくさんありますが、そこはとりあえず除いて、実態としての政治、及び実態としての政治についてのイメージに興味があり、それからカーヌーン・ナーメ、要するに王の勅令と、スィヤーセッット・ナーメつまり「政治論」「統治論」等を調べ始めました。カーヌーン・ナーメの方は、勅令と旧慣法に基づいてできあがっていく法体系、こちらは法体系で

す。ただ、法律ですが、政教、聖俗の関係をどう考えるかで違いがあって、アタテュルクの世俗主義の原則に近い先生方——オメル・ルトフィー先生とか、そういう先生方——がカーヌーンの研究の先鞭をつけた方ですが、世俗主義者なので、オスマン帝国の法体系はシャリーアとカーヌーンの2本立てであった、宗教的な法体系と、それから世俗的な法体系の2本立てであったという主旨で、だいたい全体をとらえておられたかと思うのです。ただ、イスラーム的な雰囲気にはるかに近い方が出てくると、「オスマン帝国は基本的にはイスラーム国家であって、シャリーアが法の基本をなしていて、カーヌーンはそれを補足する施行細則のようなものである」という意見もあると思っ
ていまして、私の場合は後者のほうが実際は近いと思うのです。世俗法と宗教法とが2本の柱として並立する世界じゃないのは確かだと思うのです。ただ、現実においては、カーヌーンと呼ばれている王の勅令に基づく法体系がカバーする範囲は狭くない、ということであろうと思います。これもまとまったカーヌーン・ナーメ情報——どのカーヌーン・ナーメがどこの図書館にあるというような体系的な見取り図はありませんでした。それから、政治の理念と実態と両方に触れているいろんなものがあるのがスィヤーセッ・ナーメ(統治の書)です。この類を中心にして、少しスィヤーセッ・ナーメ的な性格のあるアフラクの本も調べました。アフラクは要するに倫理ですが、倫理といっても、3つに分かれていて、第3部はマディーナの政治(スィヤーセッティ・マディーナ)ですから、政治学なのです。第2部は家政学で、第1部が個人倫理学なのです。こういうものの写本を徹底的に調べました。だいたいイスタンブールの主な図書館で、トルコ語写本のある図書館のカードに目を通したうえで、こういう関係のものはほとんど全部、実際に取り寄せて、見てみてどういう内容かということ調べて、少なくとも記述史料の中ではどんな材料があるかということについて、大きい見取り図を作りました。そのとき役に立ったのは、ブルサル・メフメット・ターヒル(Bursalı Mehmet Tahir)の本です。この人は青年トルコ革命にも関係した人で、いわゆる青年トルコ人の一員でもあるのですが、一方でオスマン朝の著作家たち全体の伝記とそれから作品の解説を集めて、3巻本(*Osmanlı Müellifleri* 『オスマン朝の著作家たち』)を出しています。第1巻はイスラーム関係、第2巻が詩人その他、第3巻が歴史家その他というので、これをいつも横に置いて見ていました。見たことがない著者がいると必ずそれをひいてみて、著作が載っているかどうか確かめる。そういうやり方をやってみながら進みました。それからもう一つ、メジウムア——小さいリサーレが集まった雑文集というか——なのですが、これに何が入っているか、必ずしもはっきりしないのです。これを片っ端から目録にある限りのメジウムアはほとんど見まして、それで何が入っているか見ると、ときに珍しいものが出てきます。そういうことをやっていて、それをぼちぼちコピーにとってもらったりして、写本調査をやっていました。

3年目になって、閲覧申請を出しておいた許可がおりてきました。トプカプ宮殿古文書館のほうから——今はここから許可を取るのが非常に手間がかかるらしいですが——許可が先に来たので、そちらに通ってカタログを頭から見て関係のありそうなところを片っ端から見ていくということをやりました。そのうち総理府古文書館のほうからも——その頃はオスマンル・アルシヴィ(*Osmanlı Arşivi*。オスマン公文書館)ではなくて、バシユバカンルク・アルシヴィ(*Başbakanlık Arşivi*)ということで、総理府古文書館という名前になっていましたが——許可ができました。ここで少し調べ出したところで時間切れになった、というところで日本に帰ってきました。

その間に、読むのに便利だというのがあって、書道をやろうと思っ
ていまして、知り合いに頼みましたら、ケマル・パタナイ先生という方に紹介してくれる人がいまして、入門しました。この方は、一方で音楽家で『ホシュ・サーダ』(『甘美な声』)という、オスマン朝末期の音楽家の列伝にも載っ

ている方で、同時に、『ソン・ハッタートラル』（『最後の書家たち』）というオスマン朝末期の書家たちの列伝にも載っている方です。そのとき、ちょうど1年前に留学していたのが、イスタンブール大学でトルコ美術史の分野で最初に学位をとったヤマンラル・水野美奈子先生でして、留学生として1年先輩になります。週に1回必ず、一緒に先生のところに出かけて行って習字の稽古をやっていました。本当は、ケマル・バタナイ先生は、音楽はタンブルの名手でいらして、息子さんがエルジュメント・バタナイさんといって、当時のトルコ共和国きってのタンブルの奏者だったのですが、ケマル・バタナイ先生は同時に、本当はターリク (talik) 体の巨匠の一人なのです。ターリク体をやりたいといいましたら、「おまえ、7年トルコにいる気があるか」といわれまして、それはちょっと無理でしょうといえますと、だったら、ルカー (nka) から始めろというのでルカーから始めました。本当は、両方やりますといえよかったです。結局、ルカー体は3年いて毎日1時間か2時間、練習をしていました。しまいには、「おまえ、イジャーゼット (師範免許) をやってもいい」と言っていたで、実際にいただきました。ルカー体は、漢字の世界だったら行書体だと思います。あれは師範免許を持っています。慶応大学の非常勤に坂本勉先生が呼んでくださって、結局、十数年断続的に行っていました。そのとき1回だけ課外授業でルカー体の実習を通年でやったことがあります。演習がすんだあと、受講者は三沢君 (編集部注：三沢伸生東洋大学教授 [現在]) とか高松君 (編集部注：高松洋一東京外国語大学准教授 [現在]) が来ていましたが、5、6人、やるという人を集めて、1年でイェー (Y) [編集部注：アラビア文字アルファベットの一番最後の文字] まで来ました。ですから、1字ずつのおさらいは終わって、これから続けて単語を書くというのが2年目ですが、もうそれはやめようということにしました。

書道をやっておくとよいのは、本人はそんなに上手に書けないでも、書かれた字を見ると、玄人が書いたか素人が書いたかすぐわかるのです。玄人が書いたにしても、自分用にさらさらっと書いたのと、誰か偉い人に頼まれて贈り物用や何かで、お金のかかるかたちで本にすることをめざして書かれたものとの、まったく違うのです。イスラーム圏のことをやっている方は、書道はなされたほうがいいです。トルコの場合は、アタテュルクの時代に、アラビア文字を教えること自体が禁止だったのです。コーランの素読をやったりしていると、アタテュルクの時代は捕まったそうです。それから、印刷頒布するのも特別許可があるもの以外は、初めは禁止だったのです。文字改革というのは、教育効率を上げるということがメインに出されているけれど、実際には旧文化に対する究極の検閲でもあるのです。ですからトルコの書道も、こっそり教えられているだけで存続は非常に危うくなってしまっていて。それでもぼちぼち続けている人がいて、そのおかげでだんだんイスラーム的なものに対して許容度が高くなってくると、表に出て、この頃、書道は大学でも教えているようで、ケマル・バタナイ先生のところに同門でいた人に、大学で准教授になって書道を教えていた人がいます。今は大学は辞めてフリーになって、書家として活動しているようですが、日本に何かのチャンスで招待を受けてきて、それで連絡が入って一度会ったことがあります。

ところで、当時日本人は50人くらいしかイスタンブールにいませんで、そのうち10人くらいが領事館——格上げになって総領事館になりましたが——関係の、つまり外交関係の方で、あとは金角湾 (ハリチ) に大橋を架ける仕事がありまして、石川島播磨の方が来ておられました。この方々が十数人いて、あと、ビジネス関係で来ている方が少しおられて、ほかは日本政府の援助で水産学校をつくったりするので、そこに先生と先生のご家族という場合もありましたが、留学生は、行ったときはヤマンラル・水野美奈子さんしかいません。しかも、あの方は間もなくトルコの方と結婚されたので、月に1回くらいしか日本語をしゃべる機会がないのです。日本語の本も面倒なので、

持って行ったのは英和・和英・独和・仏和の辞典のほかは、マックス・ウエーバーの『支配の社会学』くらいでした。本当は『資本論』も持っていきたかったのですが、持っている共産主義者だといわれても困るので…。そのくらいしか持っていってなくて、読むのもトルコ語、しゃべるのもトルコ語でした。

料理は、私は小学校にあがる前に料理百般、一応できるようになっているのです。3人兄弟で、一番小さい男の子が私でして、歳をとった者は使いにくいので、そこで私が手伝っているうちに、小学校にあがるまでには何でもだいたい作れるようになっていました。ただ、外国で自炊するのがいいように見えますが、あれもよろしくありません。というのは、知っているものしか作りませんから。知っているものという、日本料理しか知らないわけですね。日本料理じゃなくても日本風中華と日本風洋食と、それから日本料理しか作れない。現地の舌がわからないのです。私の場合は、普通の町のおにいさん、おじさんが行くような食堂に毎日通ってトルコ料理ばかり食べていました。3年目になった頃は、だいぶジャンルもわかってきて、料理の本を見て種類もわかるようになったので、週に1回くらいは普通の料理店ではない、名のあるレストランに行って味をみるということをやっていました。今なくなってしまったお店とか、存続はしているけれども中身が非常に変わってしまったお店が多いのです。ですから、割合と古典的な、19世紀末から第2共和制の時代に残っていたイスタンブールの味は、今のトルコ人の美食専門家の人よりは知っています。私の舌も、トルコの古いタイプの、山の手の上流中産階級の舌が、だいたい自分のものになっています。料理を味わう舌というものは階級によって違いますから。下町の旦那衆の世界と、それから山の手の家系オスマン朝に仕えたという人たちの子孫とは、舌が違うのです。それは京都でもあるのではないのでしょうか。上京区とか住んでおられて、昔お公家さんや公家侍で、歴代そういうところにいた方とそうでない方とは、少なくとも20~30年前まで舌の違いがあったはずですよ。言葉も違っていましたから。日本でも昭和20年代は階層で言葉が違いましたから。今よりずっと言葉の秩序ははっきりしていたのです。それで興味があって、オスマン語で出た料理書はかなり広く集めていまして、それを使って『食はイスタンブールにあり』という本を出しましたが、あれは食文化史です。

III 帰国後、今まで

そのあと、一応勉強もかなり進んで、やるとすれば、人物列伝を体系的に調べて、そのうちで一定のポストに就いた人間を集めて、その体系的分析をやれば、支配組織の中核を占めていた支配エリートのトップの連中がどう変遷したかわかるだろうということを考えて、それをやろうということで日本に帰ってきました。オスマン帝国の原初から回暦1200年(18世紀末)までに没した人物のうちで、パシャの称号を受けていた人で伝記がわかるのが1500人ほどいるのです。ある程度経歴がわかる。その経歴分析をやって、博士学位論文にまとめました。まとめるまで非常に時間がかかって、1975年に帰ってきたのですが、結局、まとめあがって論文を出せたのが1982年の3月で、学位をもらえたのがその年の9月ということになりました。基本的な材料としては、やはり年代記から全部拾うというのはなかなか大変ですので、基本的な材料はその時点ではメフメット・スレイヤー(Mehmet Süreyya)という人がオスマン末期に書いた*Sicill-i Osmani*(『オスマン紳縉録』)にしました。4巻本ですがこれを全部あさって、選り分けて——ウラマーと俗人に分けて、俗人のうちパシャとパシャでない人に分けて、没年が1200年以前のものとは以後に分けて——分析しました。だいたい1万5000人の履歴が載っているのです。お墓があって、そのお墓の墓誌が手に入ると、それは本書に載っているのです。それから、どこかに何かワクフとして寄進した記録があるとすると

と、どこそこにこの人が寄進した何々があるということが書いてあります。パシヤ 1500 人の中でも、かなり詳しい経歴のわかる人と、詳しい経歴はわからなくて「こういうパシヤがいる、どの地にいた」ということだけがわかるような人も多かったのです。後者の場合は、ほかのいろいろな材料である程度補って、そこでまとめて出したのです。全体はほぼ 4 期に分けられるのですが、だいたいの 5 世紀のうち、13 世紀末から 15 世紀中葉までが (1) 形成期です。第 7 代メフメット 2 世の時代以降、スレイマンの時代までにだいたい (2) 確立期を迎えます。中央集権的、君主専制的体制が確立して、宮廷奴隷で小姓として奉仕した人間がだいたいパシヤになる。ことに大宰相、宰相(ヴェズィール)を中心にしたトップのパシヤになるという時代がきます。16 世紀の末から 17 世紀にかけて (3) 変容期に入って、できていたパターンがかなり崩れていきます。18 世紀に入って新しいパターンがだいたいできてくる。18 世紀に出た新パターンの中で固まったキャリアのうち、大宰相が、独自の官衛かんがを 1654 年にもつようになって、大宰相府に主な支配組織の機能が移って、大宰相府で文書行政を担っていた連中がトップ・エリートになっていった。軍人の帝国だったのが、官僚の帝国になっていったというところがあって、その官僚たちの中で開明的な一群が、19 世紀になってからの新しい、近代西欧のまったく違う組織モデルを受容するときの受け手になっていくというような、だいたいの見通しがつきました。(3) 変容期が 16 世紀の末から 18 世紀の初めまで続いて、18 世紀に入って (4) 新古典期がきて、セリム 3 世の西洋化改革が始まって——あれは途中でつぶれますが——、マフムート 2 世以降、本格的な改革がはじまりますが、その受け手がこのときできていた、という見通しをだいたい持ちました。

ただ、メフメト・スレイヤーの本をベースにすると、19 世紀末から 20 世紀初めに活躍した著作者が作ったものですので、経歴情報に精粗の差が大きいのです。一人でやっているもので、名前がイブラヒム・パシヤというのと、トルコは名字がないもので、どのイブラヒム・パシヤか取り違えることがあって、けっこう間違いが多いのです。精粗の差が非常に大きいので、はっきり確定した経歴を押さえることができるのは、パシヤのうちでもヴェズィールたち、そのなかでも、地方にいてヴェズィール位を与えられている人間と、中央にいて御前会議に参画するタイプのヴェズィールと 2 通りいるわけですが、中央にいるヴェズィールたちです。そこで博士論文完成後は、帝国中央史のヴェズィールすなわち宰相たちに限定して、経歴のより詳細な探究を始めました。その成果の一部は「スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち」という論文として発表しました(編集部注：東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』所収。(一)は第 101 冊 [1986 年]、(二)は第 103 冊 [1987 年]、(三)は第 106 冊 [1988 年])。原初から第 27 代のアブデュルハミト 1 世のもとで大宰相、宰相に任ぜられたものまでの経歴の探究は、まだ続けているところでして、完結はしていません。でも、かなり広範に材料が集まっていますので、これを、まず列伝として、ついでそれをふまえた全体的分析としてまとめなければいけない、と考えています。

そうこうしているうちに、メフメット・ゼキ・パカルン (Mehmed Zeki Pakalın) の *Sicill-i Osmani Zeyli* (『オスマン紳経録補追』) が近年刊行されました。メフメット・スレイヤーも補追を用意していたといいますが、それは出版できないままでジハンギルの大火事で焼けてしまったといわれています。オスマン朝末期の頃のオスマン朝の人士についての経歴を、オスマン朝の用語事典 3 巻を出したメフメット・ゼキ・パカルンさんが『オスマン紳経録補追』という本に書いたがトルコ歴史学協会に写本のままで残っていたのはわかっていたのですが、なかなかコピーをとったりするのも厄介だと思っていたら、これがカイセリのエルジェス大学の先生たちの共同作業によって、トルコ歴史学協会から刊行されました。これをさっそく求めて全部に目をとおして、近代のパシヤたち——

300人くらいいますが——を取り出して、この特質については試験的な検討をやって論文にして、トルコ語でも日本語でも論文にして出しています。とにかくオスマン史に関しては、原初から滅亡までのオスマン朝のヴェズィールたち、大宰相ヴェズィラザムと、平の宰相ヴェズィールたち、それから18世紀の初頭、アフメット3世の時代、ネヴシェヒルリ・イブラヒム・パシャが大宰相だったときにクッベ・ヴェズィール制度が廃止になりまして、大宰相独任制になります。独任制になったあとについては、サダーレット・カイマカムという大宰相代理が重要化します。スルタンがエディルネにいたりするときに、大宰相が一緒についていったときには、イスタンブルにその大宰相の代理が任せられる、大宰相が出征したりすると君主の下にやはり大宰相代理が任せられることがあって、これが大宰相になることが多いので、これについてまで広げて、経歴分析の完成を目指しています。それから、試験的にメフメット・ゼキ・パカルンの『オスマン紳縉録補追』で、近代の、19世紀末から20世紀初頭のパシャたちの経歴分析もやったので、こちらもつなげたいと思っています。

ただ、オスマン史は、私にとっての比較史としては3本の柱の一つなのです。一つは日本。その日本も、徳川時代から明治改革期までの日本のエリートたちの構成の変動と、それから割り出される組織のあり方の変化です。意外に徳川幕府についても、戦後史学は社会経済史の研究が中心というような感じで、政治史が弱いのです。つまり、体系的な分析が意外に弱いのです。それが明治になってどう移り変わったかも含めて、これをやる必要があります。徳川については『寛政重修諸家譜』というのが、松平定信が寛政の改革のときに、旗本大名に系図を提出させて、それをまとめて本にしたのがありまして、28巻あるのです。それは基本史料です。もちろんご先祖についてはあてになりません。だいたい藤原氏とか、源氏だとか、平家だとかいうことになってはいますが、じつは地方のお百姓さんなどというのが多いはずなのです。ただ、幕府に仕えてからの経歴はかなり正確です。これが使えんと思っています、いちおう三回は頭から全部に目を通してあるので、見当はついてはいるのですが、まだ体系的分析のかたちをとるには至っていません。明治になってからはもっと簡単で、勅任官以上の経歴は、とりあえず『歴代頭官録』があります、さらに詳しいことも追えますから、それでやらなければいけない。それから、日本のもともとの先生で、アヘン戦争以降、旧来のシステムのままではやれなくなって、近代西欧のシステムを洋務運動で取り入れるようになったのが清朝ですので、清朝一代も比較したいのです。

ところで、私は文字でもって文化圏を分けるということを提唱し始めていて、1800年代にどの文字が支配的な文字だったかで文化圏を大きく分けられると思うのです。東のほうでいえば、ヴェトナムは地理的・生態的には東南アジアに位置していますが、文化的には東南アジアではないのです。あれは漢字圏です。主要なものでは、自分の国の法令や重要な役割を果たした人間の列伝も、『大南じつ寔録』のような歴史書も、重要な公文書はみな漢文で書かれています。チュノムもありますが、ヴェトナム国字を公用語にした王朝は1つか2つしか、たしかなかったと思います。あれは、地理的、生態的環境は東南アジアだけれども、文化的には漢字圏なのです。漢字圏の証拠には箸を使っています。ほかの東南アジアの諸国のなかで、タイの南部からマレー半島、島嶼部は、イスラームの戒律に従って右手を使って食べます。今の国でいうとカンボジア、ラオス、タイ、ビルマは梵字圏なのです。上座部仏教が入って、これが支配体制のイデオロギー的根幹になりますが、あの場合も右手です。箸は使わない、物の食べ方が違うのです。そして文字が違う。しかも、ヴェトナムには科挙官僚制が入っています。科挙試験が行われています。合格者名簿である『登科録』のようなものも出ています。うちの研究所でも2点ほどあるようです。これも出ていて、明らかに、日本や

沖縄よりもずっと中国式です。だいたい人名が中国式です。ヴェトナム語になまるからわかりにくいので、漢字で書いたら、ホーチミンだって「胡志明」ですから。日本や沖縄よりもずっと中国化しています。人名まで変わったのですから。それに科学官僚制が入っています。で、ヴェトナムを除く東南アジアの大陸部は上座部仏教、それからインドはヒンドゥー教が中心ですけど、梵字圏と名づけることができますと思います。要するに、ブラフミー文字系の文字を使っています。それから、西の端のほうの西欧世界は元来カトリック世界で——プロテスタントができたのでカトリック・プロテスタント世界になったのですが——、あれはローマ字を使います。というのは、聖書のラテン語訳が公定の聖書になっていて、一方でローマ帝国の延長線上で、主な公文書その他はラテン語で書かれていたのです。そこでラテン文字をもって書くようになっていきます。それは西ローマ帝国の遺産でもあります。東ローマ帝国とビザンツ帝国の関係がどうなるかということは、いろいろ論争があって、渡辺金一先生（編集部注：元一橋大学経済学部教授）がお元気だったころは、井上浩一さんと大論争をやったりしておられるけれども、私は西ローマ帝国が減んで、西ローマの帝冠が東ローマの皇帝に返還された以降の、西半分を失ったけれども、西の帝冠も返還されて、東ローマ帝国皇帝でなくなり、ただ一人の皇帝になった時点から、ビザンツ帝国と呼ぶとどうかなと思います。あその場合、その時点ではまだギリシャ語を使っていて、スラブ人たちはまだ教化されていないので、文字がないのです。そのうち、結局定着したのはキリル文字です。ギリシャ・キリル文字圏ということができると思います。東ローマ帝国、ビザンツ帝国の衣鉢を受け継いだ世界で、しかも南半分の、本来のビザンツ帝国の領地のうち、アラブの大征服で南半分が失われてしまう。シリアからエジプト、リビアまでイスラーム圏です。北半分が残っていて、北半分が全部、15世紀の末までにはオスマン帝国に飲まれてしまって、北に移ってモスクワ大公国に中心が移り、東欧正教世界になると思うのです。ただ、東欧正教世界とか、西欧カトリック世界という、いろいろ議論が出るし、東アジアも、東アジア儒教世界という、「違う、そうともいえない」という方もいますが、文字でいけば非常にはっきりしています。その文字は、重層的なところと単層的なところがあって、漢字圏では漢字が確実に使われていて、国字を使うときに漢字を変換した西夏文字だとか、契丹文字、女真文字とか、チュノムのようなものを使うところと、それからもっと表音文字的に使えるもの、かなとかハングルとかを使うところとありますけれども、漢字圏は非常に単層的だと思います。これに対して、イスラーム圏の場合は非常に重層的で、上にアラビア文字がのっています。のっているけれども、下のほうでは、アフル・アル＝ズインマつまり一神教徒としての「啓典の民」の「被保護民」場合は、従来の宗教信仰、法まで保って暮らしていて、文字については干渉がないので、いろんな文字が生きています。オスマン帝国の場合もギリシャ文字があって、アルメニア文字があって、ヘブライ文字があって、シリア文字があって、コプト文字だって、コプト教の宗教的な世界では生きています。重層的に文字が生きているのです。インドの場合は、だいたいブラフミー文字系だけれど、今でもいろんなブラフミー文字系の文字が生きているわけです。ですから、ある時点でどの文字が支配的な文字だったかで文化圏を大きく分けてみるのが、視覚的にとらえて有効だと思います。

そうしてみた場合に、我々の世界は漢字世界の一員だったのは確かで、いまでも漢字圏の一つです。朝鮮半島ではハングルになってしまって、漢字があまり使われなくなって、普通の人は漢字を知らなくなった。ヴェトナムの場合は完全にローマ字化してしまったわけですけど、しかし単語はだいたい6~7割は漢語なのです。ヴェトナムの場合、国名が越南ですから。竹内（興之助）先生のヴェトナム語＝日本語の小辞典だって、うしろに漢字が書いてあるのでわかりますが、6~7割が漢語

なのです。韓国朝鮮語にしても、だいたい6割から7割が漢語です。「てにをは」にあたる助詞と、動詞、それから一部の名詞がお国ことばで、あとの主なコンセプトはだいたい漢語ですから。そうすると、オスマン帝国というのは、アラビア文字世界における、少なくとも後半の時代におけるスンナ派にとっての世界帝國的な性格を帯びたと思うのです。漢字世界でそれにあたるのはむしろ清朝です。しかし、日本は、政治的独立を守って、自分の属する文化圏の中ではかなり迅速に近代西欧モデルの受容に成功したという点で、比較の対象として有益だと思のですが、本来、オスマン帝国と比べるべきなのは、旧漢字世界でいけば清朝であると思うのです。最初は日本とトルコとの比較を考えたのですが、清朝との比較もやりたいと思って、東大法学部で坂野正高先生がアジア政治外交史を担当するということで、おいでになってまだ数年しかたっていないのですが、学部ばんののときも授業に出ていて、それから大学院に入ってから、『籌辦夷務始末』という、清朝のアロー号戦争とか、あの頃のパタパタした時代の欧州諸国との外交関係についての上奏文と、それから上諭を集めたものがありまして、その講読のゼミにずっと出ていたのです。そのあと『清季外交史料』というのを使って、イリ問題をやるという頃になって留学してしまったので、途中で出てしまいました。これらの史料の文章は、時文というものです。漢文と白話の間のような、清末の特有の文章ですが、これをやっていたので、これにも戻りたいと思っています。その意味では、オスマン朝といっても、第2代オルハンの時代からヴェズィール(宰相)が出てきますが、これがオスマン朝をまとめるまで、ヴェズィールになる人間がどう変わってきたかという体系的分析はまだ文章として著せていない。これをやるのがこれからの仕事の一つです。ついでに、オスマン史の場合は、せっかくなので、トルコ語でオスマン朝史を、かなり大部なものとして書けたら、書きたいと思っているのです。日本語で大部なものを出しても誰も読んでくれないと思うのです。できれば、トルコ語で全8巻、4000ページくらいのオスマン通史を書きたいと思います。というのは、19世紀前半のオスマン朝の歴史は、ハンメル・ブルグシュタルという、オーストリア・ハプスブルク帝国の外交官を養成するための語学学校で東洋語を習って、のちに宮廷通訳官になって、ハプスブルク帝国でアカデミーができたときにその院長になった人がいて、これが『オスマン帝国史』という全10巻の本を出して（編集部注：Joseph von Hammer-Purgstall, *Geschichte des osmanischen Reiches*）、自分も監修して18巻のフランス語版も出ています。これは最初の3分の2くらいはオスマン語に訳されています。『ハンメル・ターリヒ(ハンメル史)』というと、原資料と同じ重みで扱われるのです。外国人が書いた本でも、250点くらい写本を集めているのですが、それがウィーンの旧宮廷図書館に入っています。あれは、本当の骨董品は少ないのです。高いから買えなかったのではないかと思います。注文を古本屋に出して、それで写本を作らせたのだと思います。19世紀の前半のものであろうと思われるものが多いです。本当に市場に出ている、古い、その著作が書かれた同時代に近い頃に書かれた写本は少ないようです。ただ、作らせた写本も集めてそれを全部読んで書いているのです。いろいろ、アメリカの方などは、批判的ではないとかいいますが、そういうものではなくて非常によくできています。フランス語訳はなかなか手に入らなくて、ドイツ語版の新版が出ていて、これを私は一応全部読んではいりますが、フランス語版はずっとあとで手に入ったのですが、フランス語訳から現在トルコ語訳があって、これと比べるとほとんど差がないのです。ということは、フランス語訳も非常によくできているのです。19世紀の前半にハンメル史があるのなら、21世紀の前半には『鈴木史』があってもよいのではないかということがあって、いつか書けたら書きたいと思っているのです。たぶん、トルコ語で口述して行って、「てにをは」はどうせときに間違えますから、トルコ語について趣味のいいトルコ人にそれを直してもらえば、それがいちばん早

いです。口述筆記だと1日10ページとかいくと思うのです。4000ページでも400日でいけますから、1年40日やれば10年でできあがる勘定です。その夢はまだありますが、今のところオスマン史というのは、本来目指していた比較史の第一段階です。第一段階もまだ完成していないのに、先のことをいうのはなんですが、いつか将来、日本の徳川の始まりから終わりまでの幕臣たちの経歴を分析してそれがどう変わっていったか、それと、明治になってから勅任官の出身、経歴がどう変わってくるかも見てみたい。これで一応、明治維新史の基礎的なところを、少なくとも支配エリートがどんな人たちで、どういう組織がどういうかたちで変化を遂げていったかは、見ることができると思うのです。中国についても、清朝の立ち上げから、1905年に科挙制度がなくなって、1911年に辛亥革命ということになりますが、それまでに一定の地位に達した、だいたい総督、巡撫クラス以上にまでに達した清朝の官人たちの分析をやっている、それでオスマン朝・日本・清朝と3つ並べるのが今のところの夢です。それからいうと、オスマン史はまだ第一段階の途中ということになります。したがって、知の先達ではなくて、まだ若手研究者です。現在はまだ、第一段階についてある程度見当がついているという段階です。

ちなみに、トルコの雑誌については、29年間、東京大学東洋文化研究所におりまして、約350種バックナンバーを揃えました。約100種がオスマン語です。その他約100種が、近代トルコ語で政治、思想、文学運動に関係するような史料的な意味のある雑誌で、さらに約150種くらいはアカデミック・ジャーナルです。イスタンブール大学の先生が「一ヶ所でこれだけ雑誌を見られるところは、イスタンブールでも少ない、非常に便利だ」といわれたくらいです。ぜひご利用になってください。長々とお話ししましたが、このへんで終わらせていただきます。

***** 質疑応答 *****

司会(東長靖) ありがとうございます。生い立ちのお話から始まりまして、8巻4000ページの『鈴木オスマン史』のご構想を伺ってすごいなと思ったら、これはまだ第一段階、という壮大な規模のお話でした。あと30分ありますので、この機会にぜひご質問ください。

男性 お話をありがとうございました。先生がお書きになられた『オスマン帝国——イスラーム世界における「柔らかな専制」』に関しての質問でもよろしいでしょうか。オスマン帝国の「柔らかな専制」は、イスラームという宗教が主要なファクターになっているというお話だと思って読んだのですが、他方、帝国という制度自体がもともと多宗教・多民族を含む制度かと思しますので、この帝国の要素というものが、どの程度「柔らかな専制」の中に含まれているかについてお教えてください。

鈴木 そもそも前近代のイスラーム世界のシステムで、政治制度は、本来イスラームから出てきたものではありません。政治制度の基礎ができたのはアッバース朝ですが、そのときに一番役に立ったのは、たぶんイラン人のイスラームへの改宗者だと思います。そもそもワズィール制度そのものにしても、イスラームからこういうものが出てくるわけではないと思うのです。また、カリフが次第に専制君主化したときに、自前の暴力装置を持つとして作りだしたのがマムルーク制度ですけれど、あれも預言者ムハンマドの時代のイスラームから出てくるような制度ではないと思うのですね。ですから、世俗的な、権力闘争で、結局、イスラームを代表するはずのイスラームの戒律を中